



及川哲郎 会長



矢数芳英 実行委員長

今回の研究会テーマについて及川哲郎会頭は、次のように語っている。「漢方医学は実臨床における膨大な経験知・暗黙知の集積といわれ、それが現代に伝わっている。本研究会

テーマは「あらためて実臨床から学ぶ」

第32回漢方治療研究会が、9月25日、東亜医学協会と東京医科大学病院総合診療科および漢方医学センターの共催で、及川哲郎会頭のもと、昨年と同様に完全オンラインで開催された。参加登録者は301名であり、ほぼ昨年と同じであった。これまでの開催状況と合わせて表1に掲載する。

新型コロナウイルス感染症下
昨年と同様に完全オンラインで開催

第32回漢方治療研究会、オンラインで開催

編集局

においても漢方医学に関する、口角泡を飛ばす厚い議論が行われてきた。本研究会が何よりも大事にしてきた実臨床から学ぶ姿勢をここで改めて確認しておきたい。そのような気持ちを含めて、このテーマを掲げることと致しました」。

○特別講演

花輪壽彦氏（北里大学東洋医学総合研究所名誉所長・名誉教授）が、「半夏厚朴湯の紫蘇葉について」と題して、半夏厚朴湯の原典・出典から使用目標の変遷、紫蘇葉の配合の

第32回 漢方治療研究会

あらためて実臨床から学ぶ

2022年
9月25日 日
10:00～17:00

■会場：Zoomを用いたオンライン開催
■参加費：一般3,000円、学生1,000円

☆今回は「オンデマンド配信」も行いますので
当日に都合がつかない先生方もふるってご参加下さい
(日本薬剤師研修センターの単位は当日参加のみが対象です)

会頭：及川哲郎（東京医科大学総合診療医学分野）
実行委員長：矢数芳英（東京医科大学麻酔科学分野）

特別講演 「半夏厚朴湯の紫蘇葉について」

花輪 壽彦（北里大学東洋医学総合研究所名誉所長・名誉教授）


シンポジウム 「印象に残った症例から学んだこと」

鈴木 朋子（埼玉医科大学 総合診療内科）、谷川聖明（谷川醫院）
田原 英一（飯塚病院 漢方診療科）、津嶋伸彦（津嶋女子医科大学）
中島正光（広島国際大学）、光畑裕正（みつはたペインクリニック）
山口竜司（山口診療所）、横山 浩一（阪クリニック神田）

シンポジスト 五十音順

参加方法：web申し込み URL：<https://kampo32.peatix.com>

■事務局：東京医科大学病院総合診療科・漢方医学センター
TEL: 03-3342-6111 内線 2152
〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-7-1
E-mail: okawa@tokyo-med.ac.jp
■主催：東亜医学協会・東京医科大学病院 総合診療科・漢方医学センター
■協賛：一般社団法人日本東洋医学学会、公益財団法人日本薬剤師研修センター



第32回漢方治療研究会ポスター

表1 近年の実施状況

回	月日	場 所	会 頭	テ-マ	参加者数
20	9/26	慶應義塾大学大会議室	村田高明	近代漢方の原点に還る	230 余名
21	9/25	千葉大学けやき会館	秋葉哲生	醫界の鐵椎から一世紀 -農・薬・医の連携新時代-	約 200 名
22	9/30	北里大学薬学部 コンベンションホール	花輪壽彦	-----	240 名近く
23	9/29	京都薬科大学	山崎正寿	日本漢方のあるべき姿をもとめて	230 名近く
24	9/28	東京飯田橋 ホテルグランドパレス	小曾戸洋	次代に残す漢方の口訣	約 260 名
25	10/4	慶應義塾大学医学部北里講堂	渡辺賢治	きくすりの薫る漢方治療への帰帰	248 名
26	10/2	北里大学薬学部 コンベンションホール	小田口浩	浅田宗伯生誕 200 年に学ぶ	約 230 名
27	10/1	コラッセ福島	三瀧忠道	語り合おう 臨床の醍醐味を	約 200 名
28	10/7	九州大学医学部百年講堂	木村豪雄	漢方三昧、博多場所	200 余名
29	10/6	OIT 梅田タワー	中島正光	書を読み、法を用い、 未だ方を守らず、心を得るとなす	約 260 名
30	9/27	千葉大学記念講堂・ WEB とのハイブリッド開催	並木隆雄	漢方医学の多様性	約 200 名
31	9/26	完全オンライン開催	新井 信	ウィズコロナ時代の漢方	312 名
32	9/25	完全オンライン オンデマンド配信	及川哲郎	あらためて実臨床から学ぶ	301 名

(敬称略)

意味などを古典を振り返り解説された。結語として、臨床の現場では虚弱で汗が出やすいタイプに用いられる半夏厚朴湯の紫蘇葉で「発汗による倦怠感」「下痢・軟便」などを引き起こす例がみられ、陳皮(橘皮)に変えたほうがよい例があると述べられ、原典から時代変遷を含め広く学び、方意を臨床に生かすことの大切さを説かれた。

○シンポジウム

「印象に残った症例から学んだこと」というテーマで、合計 8 人のシンポジストから講演があった。

1 「痛みに対する気剤の有効な症例」四逆散及び四逆散加味方」光畑裕正(みつはたペインクリニック)では、四逆散やその加味方が、急性痛・慢性痛に著効した症例を紹介した。痛みに対する治療では、血・水のみならず、気の異常も考慮することが重要であると話す。四逆散は腹の二本棒を使用目標の一つとするが、憂鬱、寝つきが悪い、残便感などがあれば、二本棒はなおあればよい程度であると話す。

2 「現代のこころの乾きに四物湯」田原英一(飯塚病院東洋医学センター漢方診療科)では、6 つの症例を通して、四物湯が精神症状を改善する可能性を示唆している。四物湯



花輪壽彦氏

は血虚の治療薬であり、顔色不良、めまい感、脱毛、月経障害、皮膚乾燥、爪の割れなどを目標とするが、ストレスへの抵抗力増強、集中心力・判断力の回復、うつや不安の改善も期待される。ストレスの多い現代社会において、様々な漢方方剤に配合される四物湯の意義を説いた。

3 「大腸がん末期の患者に活血化癥剤が著効した1症例」山口竜司（山口診療所）では、がんの漢方支持療法には扶正培本だけでなく、活血化癥も重要であることを説いている。直腸がん末期の症例を提示し、症状軽減とQOLの高い予後延長を目的に漢方薬を使用し、著効を得た。西洋薬ではコントロールが不十分な症状緩和に漢方が処方されることが多いが、漢方は対症法的ではなく補法として用いることで本来の漢方の力が発揮されると話す。

4 「約3年間で肺炎を8回発症した症例」中島正光（広島国際大学 生薬漢方診療学講座）では、提示された症例から器質的疾患がなくても細菌性肺炎が頻繁に起こりうることを述べている。叫び^レが抑肝散加陳皮半夏の指標になる。叫んでいる患者は、想像より多くいると述べ、車のなかで大声で歌う、部屋で怒鳴る、家でゴミ箱を蹴るなども、叫び^レであると述べている。

5 「新型コロナウイルス感染症罹患後症状としての呼吸器症状に對して炙甘草湯で改善した6症例」津嶋伸彦（東京女子医

科大学附属東洋医学研究所）では、新型コロナウイルス感染症罹患後症状に對しては対象療法が中心であるなか、呼吸器症状には炙甘草湯が有効であり、その使用目標について考察している。また、炙甘草湯を使用した6症例とも2週間程度で効果が表れることから、効果判定は2〜4週間とし、効果がない場合は処方変更について言及している。

6 「病名処方何が悪い!?」随証治療の迷路にはまった五苓散の一例」鈴木朋子（埼玉医科大学 総合診療内科）では、あまり表に出ることのない漢方治療の失敗例を挙げ、「随証治療」で陥りやすい事象を述べられた。漢方上級者にありがちな病名治療などを軽視し、随証治療重視のあまり、患者の主訴を見失う、結果、漢方のポリファーマシーに陥る。学術誌などでは目にするともない、漢方を学ぶ者にとっては日頃の研鑽の糧となる講演であった。

7 「月経前症候群に對する半夏白朮天麻湯の使用経験」谷川聖明（谷川醫院）では、月経に關わる異常は血の異常と捉えがちだが、月経前症候群の症例を例示し、気や水に主たる作用を有する半夏白朮天麻湯が有効であったことを話された。強いストレスにより脾胃が弱っている症例では、月経前症候群にも半夏白朮天麻湯が適応となる可能性を示唆している。

8 「冷え^レに對する附子・附子剤の使用経験」横山浩

一 (医療法人社団ひのき会 証クリニック) では、附子・附子剤を使用する勘所を知ることができた症例を提示された。遷延した難治な病態で、附子・附子剤による機能賦活が有効であった。特に裏寒証と熱証の並存による2方剤併用においては、それぞれの方意が損なうことのないよう注意し、病の本体を見極めることの重要性を説いている。

○一般演題は9題であった。

1 「重症COPDのADLと呼吸困難感が八味地黄丸合半夏厚朴湯合葶藶大棗瀉肺湯で改善した一例」 矢野博美 (飯塚病院 東洋医学センター 漢方診療科)

2 「通明利気湯の適応例」 山崎正寿 (漢方京口門診療所)

3 「炙甘草湯合生脈散加味で不整脈を主とするLong COVIDに奏効した1例」 陳暁明 (香港養生堂中醫藥株式会社臨床部)

4 「ほてりのある新型コロナウイルス後遺症3例の検討」 三橋成輝 (北里大学東洋医学総合研究所)

5 「インフルエンザなどの急性ウイルス性呼吸器感染症パンデミック/エピソードに対する和漢治療の歴史」 根津雅彦 (千葉大学医学部附属病院和漢診療科)

6 「桂枝湯加減方の新たな未来を拓く方法論」 宮澤裕治 (みやざわクリニック)

7 「芍帰膠艾湯が有効であった加齢黄斑変性症の一例」

山本昇伯 (山本眼科医院)

8 「真武湯の「身軀動振欲擗地」について」 小林瑞 (町田丘の上病院)

9 「五苓散エキス剤では効果不十分であった頭痛、めまい感に自家製五苓散末が奏効した1例」 中尾桂子 (飯塚病院 東洋医学センター 漢方診療科)

○進行

シンポジウムの座長は、矢数芳英氏、並木隆雄氏、新井信氏、一般演題は、室賀一宏氏、津田篤太郎氏、小田口浩氏、堀場裕子氏、特別講演は及川哲郎氏が務めた。リアルタイムでのオンライン発表で、質疑はZOOMのQ&A機能を使用し視聴者からの質問を座長が代読する形で会が進められた。スムーズな進行でトラブルはなかった。

○オンデマンド配信

閉会后、発表・講演がオンデマンド配信された。これまでの漢方治療研究会のなかでは初めての試みであった。200名弱の視聴があり、好評であった。

また、これまでの研究会においても多くの演題について論文文化していただき本誌に掲載してきた。今回も発表・講演をされた先生方に本研究会では述べきれなかった考察やその後の論考を加えて、本誌に投稿を依頼している。オンラインやオンデマンド視聴に加え、さらに理解を深めるよい

機会となることを願う。

○アーカイブ放送

開催前・昼休みの時間を利用して東京医科大学OBである矢数道明先生（1995年）、山田光胤先生（1994年）、矢数圭堂先生（1995年）の腹診の様子がアーカイブ放送された。在りし日の姿と術が映像で蘇る。

○東京医科大学病院漢方医学センターの紹介映像放映

開学100年を迎えた東京医科大学の記念プロジェクトとして2019年7月に新大病院が竣工した。本研究会がコロナ禍でオンライン開催となったため、講堂や会議室が使用できなかった代わりに東京医科大学病院漢方医学センターの紹介映像がオンラインで放映された。映像には、新宿にある東京医科大学病棟の歴史に始まり、漢方医学センター、東京医科大学OBの漢方医である、矢数道明先生、山田光胤先生、矢数圭堂先生が紹介された。そして、漢方にゆかりのあ



矢数道明先生



山田光胤先生



矢数圭堂先生

る東京医科大学出身の現役医師として、山田博一氏、平馬直樹氏、吉益均氏（吉益東洞の子孫）、山田享弘氏の紹介があり、東京医科大学は漢方に関わる医師を多く輩出していることが分かる映像となっていた。

東亜医学協会賞表彰式

本協会では本誌掲載論文の中で優秀論文を顕彰している。第26回東亜医学会賞は『漢方の臨床』第69巻3号掲載の「超高齢者における厥陰病」小林瑞（町田丘の上病院）が受賞した。第26回東亜医学会学術奨励賞は、『漢方の臨床』第68巻12号掲載の「日本東洋医学会主導新型コロナウイルス感染症の臨床研究、背景と進捗について」高山真氏（東北大病院 総合地域医療教育支援部／総合診療科・漢方内科）



東京医科大学病院紹介映像の一部

が受賞した。

表彰に先立ち、東亜医学協会の花輪壽彦理事長より、本協会の概要が述べられた。引き続き、選考委員会の花輪壽彦委員長から選考の評が述べられた。超高齢者にみられる寒熱錯雑や認知症の周辺症状などを厥陰病という病態で捉えるという論旨に対して、小林氏の論文が選考委員会で東亜医学会賞に推挙された。また、高山氏の論文に対しては、新型コロナウイルス感染症に対して日本の医学がどういう対応をしているのかを会員の皆様に知っていただくために、前回の漢方治療研究会における高山氏の講演内容を本誌に投稿していただいた。このことが選考委員会で評され、学術奨励賞の受賞となった。

閉会の辞

矢数芳英実行委員長から、ご発表の諸先生方、実行委員、配信担当のクロスコ(株)、協賛企業、ご寄付をされた方に感謝を述べられた。

矢数道明先生の腹診映像に始まり、発表・講演以外の休憩時間には、山田光胤先生、矢数圭堂先生の腹診、東京医科大学病院の紹介映像の放映と、隙間のない研究会であった。

第32回漢方治療研究会雑誌

事務局

本研究会は東京都内スタジオ(六本木)から配信した。Web配信が日常化したなか、来年はハイブリッド開催を予定している。3年越しの対面開催となる見込みで、楽しみにしていただきたい。今回も、昨年同様、映像配信などデジタル技術面においては全てクロスコ(株)に依頼した。感謝申し上げます。最後に本研究会を配信したスタジオの様子を写真でお届けする。



開会の挨拶をされる及川哲郎会頭



集合写真 前列、クロスコ(株)スタッフ
後列、スタジオ入りした運営スタッフ